
ニートの無限回廊

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートの無限回廊

【Nコード】

N3762E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

ニートという暗いトンネルに入った作者の心の軌跡を綴っていきます。

毎日毎日、日は東から昇り西に沈み夜はやってくる。

この規則正しい地球の営みを感じるのも今日で何回目だろうか
そして後何回感じれば、私に変化が訪れるのか全ては闇の中。

昔の人が闇が続くさまをトンネルに例える。

トンネルの入り口は暗く、中に入れば無限に続くかのような闇の回廊が続き、しばらくすると明るい光の差す出口を通り抜けることができる。

私の今の境遇は、丁度トンネルに入った暗い闇の回廊の途中に突っ立ってるのと似たようなものである。今トンネルのどのあたりなのだろうか・・・

そしてその闇の空間をいつしか抜けて、光の差す地へと

私は走り出る日が来るのだろうか。今のところその過程への心の動きは高ぶることもあるが

目に見えない巨大な何かに押さえこまれてるかのよう、或いは、重さ1000トンの石のベルトを腰に巻いてるかのごとく、私を今の位置に留まらせる。

その原因が自分自身にあるということとはとくに分かっているが、いつまでも気づかないふりをして生きてきた。

私は元来物事について深く考えない人間だ。その時その時が楽しければ

何の不平不満を抱くことがなく、快樂やゆったりとした時間にいつまでも浸っていたい人間である。

しかし、現実自分が思っている通りには行くはずもなく楽しい、快樂を味わえる状況がくことは極稀である。

私は現実という空間で自分が考えるものとは違う、自分の理想としない一見快樂とは程遠いものと向かい合うたびに、色んな娛樂と呼

ばれる媒体を駆使してみたり、寝ることや考えることを辞めるといふ行動によって心の負担を回避し続けてきた。回避するたびに一時的とも言える快感を得たが、言いようもない不安と、後回しにしてきた物が積もりに積もって、私の前にとてつもなく厚い、そして太陽を仰ぐような高さの障壁となつて立ちほだかる。

それにしても、この障壁がつみ上がっていく発端を考えないといつまでも越えられない壁として存在し続けるのかもしれない。一度自分を分析する意味でも過去の自分を振り返るのはだろうか。

少し自分の今まで生きてきた軌跡を分かり易くするためにも物語風味にイメージ化して、私の小学校時代から振り返ってみようと思う。

小学生の頃の私は人見知りをし、内気で引つ込み思案な性格だった。

内気で恥ずかしがりやの私は、同級生に話しかけたりするのが苦手で、無口を押し通していた。

周りからは喋ることができない奴だと罵られ、時には苛められもした。

授業が終わって、休憩時間に入ってもいつも一人で行動していたのを覚えている。

良く考えると、このあたりから既に、今の状態に至る要因である性格は持ち合わせていたのであろう。

私は当然ながら、学校からいつも一人で帰る。その帰り道の気分は至福の時である。会社員が仕事を早く終え、労働から解放されて家でテレビを見よう、ビールを飲もう、とあれこれ楽しいプランを頭の中で想像しながら帰宅するのと似ている。

私の家は比較的、近所でも大きい方の部類に入る。その家の黒い鉄格子の門が視界に入ると、自然と駆け足になる。家に着くと私は、

家の門をぶつきらばうに開け早足でぐりぬけ、玄関をガラーガラーという音を立てて勢いよくあけた。玄関をくぐった瞬間、学校で内気で無口な少年は一変する。「ただいまー」と元気のいい声で帰ったことを母親や祖母に伝え、急いで靴を脱ぎさる。

靴は玄関の地面に無造作にばら撒かれている。私は台所で夕食の用意をしている母親を見つけると、「今日の晩御飯のメニューは何？」とか「おやつはある？」と大きな声で言葉早に母親に尋問するのがいつもの日課であった。

学校で無口を通してはいるが、本来は人と話すのが大好きで、家族とは普通に話すことができる。いや、学校で無口に耐えて喋りたい衝動を抑えている分、その反動は大きく、家ではどしゃべりになり、気持ちも萎縮してた分途端に大きくなるのである。少し内弁慶なところがあったと思う。

私は家に帰り母親や祖母と少し話し、母親の用意したオヤツを食べ終えんと、外に元氣よく飛び出していった。

向かう先は近所に住む同じ学校に通う 一つ年下の友達 の家である。

一つ年下の友達の幸太郎の家は向かい三軒右にあり

彼の家は私の家より少し小さいが、ごく普通の一軒家である。

彼の家の鍵はいつも空いており、私が遊びに行ってもすんなりドアが開く。

ドアを勢いよく開き、私は「こうちゃんあそぼ！」とかなり大きめの声で

呼びかける。それを聞いたこうちゃんが玄関まで出てきて私をみるや「じゃあ野球でもしよう」と提案した。私は「うん、じゃあ近くの丸尾と荒田も誘おう」

二人の意見はまとまり、野球に使うグラブ、バット、ボールの3種の神器を持つと

近所に住む丸尾の家へ一緒に歩いていった。丸尾は最近引っ越して

きた男の子で

私寄り3年年下である。「まるちゃん！あそぼ！」私とこうちゃん
は息があい

ほぼ声を重ねるようにまるに呼びかける。目をこすりながらまるは
出てきた。

「うーん、なにすんの？・・zz」と丁度寝てたらしく少し怪訝そ
うな顔をしていた。

「野球せーへんか？その空き地でやらへん？」と私は声をかけた。
「まるちゃんいこ！」とこうちゃんも後押しする。まるはこうちゃ
んと仲が特に良く、「じゃあやるか！」とまるは少し機嫌をなおし
たのか軽く笑みを含みそう言った。

話はまとまった。

次は荒田も誘いに家へ行った。「ピンポーン」「・・・・・」
留守らしい。「うーん、仕方ないなあ、3人でやるか、俺ピッチャ
ーな」と私は有無を言わず

ピッチャーの花形ポジションを獲得する。「こうちゃんはバッター、
まるはキャッチャーでいこう」その私の提案に「いいよ」と二人
は答える。不満は少しはあるだろうが

そこは臨機応変に話は進む。「しばらくしたら交代するからな」と
私は言う。

「OK!」とまる、「それでいいよ」とこうちゃんも了解したよう
だ。

この辺の会話の進みはやはり私が上級生であるのでほぼ決まる。
私に決定権がいつもあった。

空き地にやってくると、私はおもむろにポケットからチョークを
取り出して足元の地面に

線を引く。「ここがバッターボックスな」とみんなに言った。

「じゃあ、みんなポジションについて！」その私の声を聞くと

「おーっし」とこうちゃんはやる気を垣間見させる。

まるはそのこうちゃんの後ろに静かにウンコ座りで座る。

こうちゃんは「ホームランうつからゆっくりなげて!」とかボケをかましてくる。

ブンブンバットを振り回すこうちゃんを見て、マルは少しバットが当たらないか心配そうである。

私はこうちゃんから向かって5Mくらい離れた位置にたつ。

「俺の剛速球打てるものなら打ってみろ!」と私は声高に言つとどこかのプロ野球選手の投手の癖を真似した投げ方で

マルのグローブめがけて思いっきり投げ込んだ。

その思いっきり投げ込んだ球は、力が入ってる割にそれほど早くもなくなんなくこうちゃんは、バットに当てた。

「うわあ」その打球の速さに私は思わず声が出る。

「ホームラン!!!」こうちゃんは勝ち誇ったように言つた。

ベースはないので、適当に一周する。

「やられた・・・」私は少し肩をおろす。

「次だー次ー」と俺は悔しさをにじませ、こうちゃんに再度挑戦を申し込む。

「いいよ〜どんどんこい」こうちゃんはもう有頂天だった。

その後もまる、私、こうちゃんとポジションを替えがえ野球は続いた。

私も打ったり打たれたり、まるだけは三振が多かったし、ホームランもうつたれていた。

最年少だから仕方が無い部分もある。そうこうしてるうちに日は傾き西の空はオレンジ色に染まっていた。山の向こうに太陽が沈みかける頃

野球は終焉を迎えた。

「今日はこのへんでおわるっか」私は少し疲れ気味に切り出した。

「そうだね、ちよつと疲れた・・・」こうちゃんもばててるようだ。

「うん、そうしょ」とまるも同調する。

まとめ役の私が「今日の最優秀賞はこうちゃんです」と言つた。

「わーい、俺MVPー！」とこうちゃんはVマークを私とまるに見せ付ける。

「こうちゃんおめでとー」まるは笑顔を浮かべながら勝者を称える。「ちっ次はこうはいかないぜ、またやろっ」と私は締めくくった。

良く遊んだ満足感が体中に広がっていた。

「じゃあ解散、またなー」と私は言う、「またー」とまるところちゃんは答え

三人ともそれぞれの自分の家がある方へ散っていった。

私は外から帰宅すると玄関には明かりが灯っていた。門を「ガチャン」と雑なかんじで

開け、「ガチャン」とまた閉める。そしてスライド式の玄関を「ガラガラ」と勢い良く開け

「ただいまー」と帰った事を告げる。もちろん玄関の扉も「ガラガラドン」と閉める。とにかく全ての行動が大雑把であった。

私が帰って来たことに気づくと、母親は台所からスリッパの独特の足音をたてながら

玄関にくると、「おかえり、帰ったら手洗いなさいよ」と私に声を掛けた。

「はいー」と私は答えると、急いで靴をぬぎさり足早に廊下から台所を走り抜け

洗面所へ向かう。

蛇口を思いつきりひねり、水がでるのを確認すると

その小さな滝に両手を侵入させて掬い取り何度も顔にあびせた。

そして石鹸をあわ立たせて手を洗う。

この一連の動作はすぐ雑で、洗い終わったあとは洗面台はもとよりその地面もところどころ水が飛び散っていた。

母がそれを見ると、「あんた地面ぬれてるからきっちり拭きなさいよ！」と

少し怒ったような口調でまくしたてる。

母の怒りを察し、「わかってるよー」と少し面倒くさいそうに私は答えた。

洗面所から台所に行くと、テーブルには今日の晩御飯が既にセッティングされていた。

ハンバーグとそこに添えられたレタス、煮物、トウモロコシ、手作りのきゅうりの漬物

どれも私の好物である。

それを見た私はおなかが減ってることに気づかされ、その感覚が大きくなるのを感じた。

「まだおとーちゃんが帰ってないからご飯もう少し後ねー」と母親は言う

と私が聞くと、食べ物にラップをしはじめる。「とうちゃんいつ帰ってくるの?」

「さっき電話あったから7時くらいとちゃうか?」と母親は答える。

「そっかーわかったー」と私は言うと、二階へいくため階段のほうへ向かった。

二階には応接間、トイレ、私の部屋、妹の部屋、父母の部屋と、ベランダ、トイレ、食器棚

コンロがあり、家族の居住空間としては十分過ぎるほど揃っていた。「ドドドドドードーン」っとものすごい音を立てて駆け上がる。

そして応接間のドアを開けた。そこにはテレビを見ながら猫をひざに乗せている妹の姿があった。「おにーちゃんお帰りー」と由起子は言った。「おう、ただいま」と私は答える。

由起子は私より二つ年下である。

「おにーちゃん何してたの?もうこんな時間だよ」と由起子が聞いてきた。

「まるとこうちちゃんと野球してたんだよ」と私は答える。

「ふーん、あはははは」、「テレビのアニメに気持ちがいって聞いてきたわりにはどうでもよさそうである。

その由起子の膝にのっている、我が家の飼い猫「コロ」は気持ち良さそうに

ちょうど円のように、体を内側に折り曲げ、顔は少し上向きにして「グルグル、グルグル」と

猫が気持ち良い時に発する独特の声とも鼾とも言えない音を発している。

私はそのあまりの可愛さに、思わずお腹のあたりをさすってみた。

コロは一瞬驚いたように目を開けるが、私を確認したのか、また気持ち良さそうに

目を閉じていった。

由起子が見ているアニメは、もう始まって15分は過ぎていた。

私も結構楽しみにしているアニメだ。「ああ・・・もう少し早く帰れば・・・くそお・・・」

と心の中でつぶやき悔しさをかみ締めた。

そうしてるうちにアニメは終りエンディングの歌が流れ始めた。

「あー面白かった」と由起子は満足げに言った。

「お兄ちゃんももう少し早く帰ってくればよかったのにね」と少し得意げに私に言ってくる。

「いいんだよ、野球楽しかったから！」と悔しさを悟られないように静かに私はそう言い放った。

由起子はTVを消しコロをなで始めた。

私はそれを見て、コロの尻尾を軽く引張ったりしてみる。コロは気持ち良さそうに

「グルグル」という音を断続的に発し続けた。

部屋は静寂に包まれ、ゆったりとした時間が流れていった。

しばらくすると、その静寂に割り込むようにして

「ブーン」「ガチャガチャ」という音が外から聞こえる。

門が開く音とバイクのエンジン音だ。

「お父さんだ！」と由起子が嬉しそうに言った。「ほんとだ」と私も同調した。

私と由起子の父親、晃作が仕事を終え帰ってきたのである。時計を見ると、時間は夜7時を10分ばかり過ぎていた。

「ただいまー」と父親晃作の声がする。母は玄関にやってくる。「おかえりなさい」と父に言った。

「疲れた、晩飯できてる？」とか、会社であつたことを母と話してるのが聞こえてくる。

由起子が1階に下りていく、私も少し後から1階へ降りて行つた。

「おかえりーお父さん！お疲れさん！」と由起子は元気のいいかんじで

父に言った。「おう、ただいま」と父は由起子に返した。

私も階段を下りて、丁度玄関を遮る壁からひよいと顔をだして

「おかえり」とぼそつと言つた。父は「おう、ヤスただいま」と私に言葉をかえした。

私は下の名前が靖男と言う。父からはヤスと良く呼ばれていた。父を先頭に家族が食事をするために、台所の方へそろそろ向かい始めた。

父が帰つて来たのを祖母が気づいたのか、祖母の部屋の引き戸が開いた。

「おかえり」と祖母は父に言つと、「うん、ただいま」と父は祖母に言つた。

祖母は私の父親の母親である。

一通りの家族の父との挨拶が済むと、次は食事である。

みんな決められた席に向かう。

一家の大黒柱である父の席は長方形のテーブルの縦の部分であり偉い人や王様が良く座る位置である。私は長男ということなのかその向かい側の縦の部分に座る。丁度父と顔が向き合う場所である。左横には祖母、右横には母親、妹が座る。

母の横には炊飯器があり、その蓋をあけるとお茶碗にご飯をいれ「はいおとうさん」と言つてお茶碗を渡した。「おうありがと」と

父は言った。

次に私、祖母、母、妹、とご飯が渡っていく。今から思い起こすとこのご飯の配られ方は大体決まっていたようだ。

「おかあ、麦茶ちょうだい」と私は母に言った。すると「自分で立って動け」と母は少し怪訝そうに言った。「ケチー」と私は言う、面倒くさそうに立ち上がり

冷蔵庫を開き中を見渡し、麦茶の入った長い入れ物を取り出すとコップを食器棚から取り出し、テーブルに置き麦茶をその中に注いだ。

今日は私の大好きなハンバーグである。

「いただきます」と家族全員が両手をあわし言つと、各々がご飯を食べ始める。

私はガツガツ食べはじめた。ほとんど噛むというよりは流し込むかんじで食べる。

「んくつ」と一瞬喉につまったので、麦茶を流し込んだ。

それを見た母親は、「あんたもつとゆっくり食べなさいよ、ご飯は逃げないから!」と

少し呆れ顔で軽く笑みを浮かべて私に言った。祖母と父はそれを見て少し微笑む。

「あは」と由起子も笑った。

由起子は私とは対象的で細かく細かくご飯を食べていく。

「やっぱり家で食う食事は最高だな」と父は言つと、ご飯をかきこんだ。

「そうね」と母親は笑顔で返す。

学校であった話、世間話や会社であった話などで家族の団欒の時は盛り上がる。

しばらくして、祖母は夕食を食べ終わると、「ごちそうさま」と手をあわし

食器を洗い場にもっていき、てきぱき茶碗を洗い始める。

父はそれをみて「おかあはん、もうええんか？」と言うと
「お腹いっぱいやさかい、もう食べられへんわ」と祖母は返した。
祖母は一通り自分の食器を洗い終わると、自分の部屋へ戻っていった。

祖母が部屋へ戻った後も、夕食は続いた。

「ヤス！学校どうだった？」と晃作は私に聞いてきた。

「んー特に何も？」と私は答える。

「何もって・なんかあるやろ」

「友達できたか？」と父は言った。

「友達は国城だけだよ」と父に返す。

「あいつだけか？もつと他の友達つくれよ」と父は言った。

「まあまあ、友達いるんやからいいじゃない、お父さん」と母が優しくフォローしてくれる。

「まあそうやけど・・・」父は言った。

「母さん、胃薬くれ、後、水な」父は母に言う

「はいはい、ちょっと待ってね」と母は自分の隣の棚にある胃薬を持って

「10錠やったね」と言い、洗面所にいき、コップを漱ぐと薬と水を父に手渡した。

（はー、何とか落ち着いたか、やれやれ）と私は心でつぶやくと
「ごちそうさまー」と言い、その場を逃げるように後にし、二階へ上がっていった。

「はー疲れる」と私は言う

とTVをつけた。
何かのバラエティー番組がやっている。

TVを見ながらも一階の音に注意を払う。
しばらくすると、誰かが階段を上ってくる音が聞こえる。

「トン、トン、トン、トン」と軽く小さな足音だ。

（これは・・・由起子だな・・・ふー）と私は心で思うと、少し

緊張を緩める。

「あーおなかいっぱい」と由起子は言った。

「おにーちゃん、何見てるの？」と言うと、私の隣に座り、TVと一緒に見始めた。

また、階段を誰かが上ってくる音がする。

「ドン！ト・ト・ト・ト・ドン！」

（これは・・・お父さんだ・・・）と私は父が上がってくるのが分かった

一気に体に緊張が走り、少しそわそわした気分で、応接間へ入ってくる父を待ち受ける。

父は応接間を通り越し、自室のドアをあける。

「ドン」と扉が開く音がする。

「ガラガラガラ」と父は応接間と父の部屋を仕切る引き戸を開けた。

そして、衣装棚に向かうと、扉を開け、ネクタイを外し、着替え始めた。

私はTVを見ながらも、父が着替えてる様子をちらちらみながら、警戒を怠らない。

「アハハハ」と由起子はTVを見ながら笑う。

私とは対比的に由起子はすごく寛いでいた。

しばらくすると、父は「トン」と引き戸を完全に開けきり応接間へ入ってきた。

「ん？何見てるん？野球みせてくれへんか？」と父は言う

「えええええええ、見てるのに」と由起子が不満そうに言った。

「えええええ」と私も重ねるように言う。

「何がええええええじゃあ、わし疲れてるねん、見せてくれやあ」と父は言う

私たちの反対を押し切り、TVのリモコンを奪うと、野球放送のあるchに変えた。

私は父にchを奪われると、ふてくされた顔で部屋を出た。

「はあゝあ」と言いながら由起子も自室へ歩いていく。

父はなんといつても、一家の大黒柱であり、威厳の塊のような人間で父に意見が通るような事はなかった。

祖母はともかく、父の言葉はこの家では絶対である。

私は、部屋に戻ると、本棚から何回も読んでいる漫画の一つを選び取り出すと、ベッドに寝転び読み始める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3762e/>

二ートの無限回廊

2010年12月14日17時35分発行